

中山間地域におけるソーシャル・キャピタルの把握 —量的調査方法の検討—

吉村隆¹⁾、秋山剛²⁾、北山秋雄²⁾

1) 中京学院大学

2) 長野県看護大学

A grasping of the social capital in semi-mountainous region : Methods for quantitative research

Takashi Yoshimura¹⁾, Takeshi Akiyama²⁾, Akio Kitayama²⁾

1) *Chukyo Gakuin University*

2) *Nagano College of Nursing*

目的：本研究では、ソーシャル・キャピタル論においてこれまで着目されてこなかった要素に注目し、従来とは異なる視点からソーシャル・キャピタルの把握を試みる。これにより、中山間地域のソーシャル・キャピタルを捉えるための手法に関し基礎的資料を提供することを目的とする。

対象：中山間地域に居住する40歳以上の男女合計342名。

方法：郵送による自記式質問紙調査。調査票は、ソーシャル・キャピタルに関連する36項目と、個人属性（性別、年齢など）の10項目、基準関連妥当性を検討するための、SF-8（SF8 Health Survey）の8項目を加え、合計54の調査項目から構成されている。調査結果を因子分析（プロマックス回転、最尤法）し、因子構造の分析をおこなった。

結果：調査票は中山間地域の居住者合計342名に配布し、217名から有効回答を得た（有効回答率63.4%）。因子分析の結果5因子（第1因子：近所関係の質、第2因子：地域への愛着、第3因子：自然との共生、第4因子：信頼感、第5因子：地域参加）が抽出された。基準関連妥当性の検討においてSF-8との相関を求めたところ相関係数は0.17であった。内的整合性は、Cronbach's α 係数（0.91）および折半法によるSpearman-Brownの係数（0.85）を算出し検討した。内容的妥当性は、先行研究との整合性、研究者間および地域の看護専門職との内容検討、さらにI-T相関分析より確認した。

結論：抽出された5因子を確認すると、一般的にソーシャル・キャピタルの要素といわれている「信頼」「規範」「ネットワーク」以外に、【自然との共生】、【地域への愛着】の2因子が抽出された。このことから、これらの要素が中山間地域のソーシャル・キャピタルに関連している可能性があると考えられた。

Key words：中山間地域（semi-mountainous region）、ソーシャル・キャピタル（social capital）、量的調査（quantitative research）

(2016年3月9日受付 2016年6月23日受理)

I 緒言

連絡先：〒509-6192 岐阜県瑞浪市土岐町 2216
中京学院大学
吉村隆
TEL 0572-68-4555 FAX 0572-68-4568
E-mail: t-yoshimura@chukyogakuin-u.ac.jp

近年、地域における人間関係や人々の信頼関係などを意味するソーシャル・キャピタル（Social capital、以下 SC）という概念が、健康に関連する社会的決定要因の一つ¹⁾として注目されている。実際に健康日本

21 (第2次) では、国民一人ひとりが社会参加し、支え合いにつながり、健康づくりに取り組むために SC が不可欠なものであると、その重要性が示されている。しかし、SC の概念については、現在も一般的な合意がないといわれており²⁾、多くの研究では Putnam³⁾ による「人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を高めることのできる、信頼、互酬性の規範、ネットワークといった社会組織の特徴」という定義を用いている。

SC の測定に関する研究をめぐっては国内外を問わず、多くの国や地域、あるいは分野で研究がなされている。わが国においては、Putnam によって示された「信頼、規範、ネットワーク」の3つの切り口を踏まえた全国規模の調査^{4~6)} から、いくつかの自治体に焦点を当てた研究⁷⁾、あるいは個人レベルを分析対象とする研究^{8~9)} まで豊富に存在している。そしてこの SC の豊かさが健康に好ましい影響を与えることは、マルチレベル分析においても実証⁸⁾ されており、SC が健康に関連しているという見解はわが国においてもおおよそ一致している¹⁰⁾。このように、SC は健康に深く関わる概念であるにもかかわらず、前述したように未だその概念の一般的な合意はない。さらに、量的測定をめぐっても統一された手法はなく、その要素にはどのようなものがあるのかという議論も尽くされていない。前述した Putnam によれば、SC 要素は「信頼、規範、ネットワーク」であるが、日常生活の中では、つながりや絆のような目には見えない何らかの力として認識されることも多いと考えられる。つまり、こういった要素は、地域やその中にある人間関係へ分け入ることによってはじめて捉えられる要素を含んでいると考えられる。したがって、SC の要素は地域特性の影響を受けることが推測され、地域によって異なる可能性があると考えられる。実際、今日では従来の SC に関する研究に対し、分析対象となる土地の地域的脈絡に注目する必要性があることが指摘^{9, 11)} されるようになり、SC を捉える際には、地域に存在する伝統などの地域特有の事情に目を向けることが不可欠^{8, 12)} となっている。このような指摘を踏まえ、本研究では「信頼、規範、ネットワーク」以外の、これまで検討されてこなかった要素（自然環境要因や地域への愛着など）にも注目し、従来とは異なる視点から SC の把握を試みる。これによって、中山間地域の SC を明らかにするための手法に関し、基礎的資料を提供することができると思われる。

II 研究方法

A. 調査項目の作成

本研究では、SC の調査項目を網羅するため、まず SC の調査票のひな形¹³⁾ といわれている Grootaert ら¹⁴⁾ の調査項目を確認した。その後、代表的な先行研究^{4~5, 15~20)} における調査項目を確認し、類似した内容のものを抽出した。次に、筆者らが中山間地域の人々の暮らしから SC の特徴を質的に探究した調査結果¹¹⁾ を確認した。この質的研究では中山間地域の SC の要素として、4 領域（“地域や近所との人間関係” “地域への意識・態度” “地域内の関係性” “自然との関係性”）、14 カテゴリー（“集落の人とのふれあい” “和を大切にした暮らし” “暮らしの中にある人間関係の絆” “集落の中で役立つこと” “集落内や近所との助け合い” “集落の一員である自分” “集落への愛着” “文化や伝統の継承” “集落存続への希望” “集落のまとまり” “集落内で集まる機会の減少” “新参者の受け入れにくさ” “自然と共生した暮らし” “自然を守りたい”）が抽出されている。そこで、質的研究から抽出されたこれらのカテゴリーの概念と、既存研究から抽出した項目とを照らし合わせながら、既存研究の調査項目によってカテゴリーの情報が得られる項目を抽出し、それ以外の場合は、カテゴリーに関する概念を明確にした上で、そのカテゴリーに関する情報が得られる調査項目を作成した。そして、尺度開発に精通する専門家および、看護学の専門家2名と内容の妥当性を検討しながら最終的に36項目に集約した（表1）。

回答肢は回答および得点化が容易な5件法が適していると考えられたが、先行研究が5件法以外である場合はそれに倣い4件法（問31～問36）とした。また、回答の得点化に際しては、5件法の場合は、例えば、「1. 自身が住んでいる地域が好きですか」であれば、「1. 好きである（5点）」から「5. 好きではない（1点）」というようにして、全て逆転項目として処理、得点化し、4件法の場合も同様に逆転項目として処理し得点化した。

このようにして作成した調査票の原案を用いて、中山間地域に居住する40歳以上の男女10名（男性5名、女性5名）にプレテストをおこなった。プレテストおよび意見聴取の結果、文書表現の一部を修正する以外は回答可能であり、内容も理解できることが確認され、回答に要する時間も15分程度であるため適当であると判断された。

表 1 SC 関連 36 項目

項目	回答方法
1.ご自身が住んでいる地域が好きですか 2.地域の雰囲気や土地柄をどう思いますか 3.住んでいる地域を大切に思いますか 4.これからもこの地域に住み続けたいですか 5.この地域で生活することに満足していますか 6.お住まいの地域の伝統、文化、風習を伝承していくことにかかわっていますか 7.地縁的な活動(自治会、町内会、婦人会等)にどの程度参加していますか 8.スポーツ・娯楽活動(芸術文化活動、生涯学習等)にどの程度参加していますか 9.ボランティア・NPO・市民活動(まちづくり、子育て等)にどの程度参加していますか 10.その他の団体、活動(商工会・業種組合、宗教、政治等)にどの程度参加していますか 11.あなたにとっては利益がないかもしれませんが、地域全体にとっては利益があるような活動に、かかわりたいと思いますか 12.自分もこの地域の一員だということを感じていますか 13.近所の人とあいさつや、会話をする頻度について教えてください 14.普段の近所付き合いで、地域の人の冠婚葬祭のことなどを知る機会がありますか 15.近所付き合いで、できるだけ近所とあわせた付き合いをするようにしていますか 16.ご近所の人へ迷惑をかけないように生活していこうとしていますか 17.体調が悪い時、近所の人を声をかけてくれたり、世話してくれることがありますか 18.地域で冠婚葬祭などがある場合、あなたは地域のどれくらいの人に、お祝いや香典を出しますか 19.ご近所の方は、あなたの心配事や愚痴を聞いてくれますか 20.地域のどれくらい範囲の人と、つながりや絆を感じますか 21.あなたの地域に他の地域から移り住みたいという人がいる時、あなたはその方を受け入れますか 22.地域の人は多くの場合、他の人の役に立とうと思えますか 23.ご近所の人とのお付き合いの程度について教えてください 24.親戚・親類とのお付き合いについて教えてください 25.生活に地域の人や近所の人とのつながりや絆を感じる活動やお付き合いがありますか 26.地域の自然を、かけがえのない存在だと感じますか 27.地域の自然に対して、人間の力を超えたおそれ(畏れ)のようなものを感じますか 28.自分自身が、地域の自然の営みの中に生かされている存在だと感じますか 29.地域にある自然は、あなた自身の心身の健康に役立っていますか 30.あなたの生活には、地域の自然の恵みによって成り立っている面がありますか	5 件法
31.近所関係について教えてください 32.住んでいる地域の人々に対する信頼について教えてください 33.国内の旅先や見知らぬ土地で出会う人について、どのくらいの人を信じますか 34.友人などと一緒になった時に、政治の話をしめますか 35.投票には行きますか 36.政治活動に参加していますか	4 件法

B. 対象および方法

調査対象地域は岐阜県の南東部に位置する A 市（人口約 8 万人の市で、世帯数 27,885、高齢化率 25.9 %）ある。市域の約 8 割は森林で占められており、標高 1,600 m を超える山々がそびえているため山地が多い。また、市内には本流に注ぐ支流が数多くあり、その支流沿いに広がった河岸段丘が生活の場となっている集落も多い。

調査票の配布は、町内会、まちづくり協議会および消防団に協力を依頼し、40 歳以上の男女が住む世帯に

自記式無記名調査票を個別配布した。回収は同封した返信用封筒にて各自投函してもらうように依頼し、調査票の返送により調査への参加同意が得られたとみなした。調査期間は 2012 年 7 月下旬～9 月上旬であった。

C. 調査票の構成

調査票は、プレテスト後に内容や表現を精選した上記の 36 項目と、個人属性（性別、年齢など）の 10 項目、そして、基準関連妥当性を検討するための、SF-8 (SF8 Health Survey) の 8 項目を加え、合計 54 の調査項目から構成されている。なお、SF-8 は NPO

法人健康医療評価研究機構のスタンダード版（振り返り期間が過去1ヵ月）を使用した。本尺度は福原ら²¹⁾によって妥当性、信頼性が検証されている。また、SF-8の使用に関しては同機構から使用許諾を得た。

SF-8は、健康関連QOLを測定するSF-36v2と同様に、8つの健康概念、すなわち、①身体機能、②日常役割機能（身体）、③体の痛み、④全体的健康感、⑤活力、⑥社会生活機能、⑦日常役割機能（精神）、⑧心の健康の測定ができ、疾病に罹患している状態から一般に健康的な者の健康に関連したQOLまで、身体的サマリースコア（Physical component summary：PCS）と精神的サマリースコア（Mental component summary：MCS）の2つのサマリースコアによって連続的に測定できるとされている。

D. 解析方法

解析では、最初に全ての項目を単純集計し、フロア効果および天井効果の解析をおこなった。その後I-T（Item-Total）相関を算出し、SC関連36項目の因子分析（プロマックス回転、最尤法）をおこなった。因子数は累積寄与率が50%を越えるところのものを採用し、因子名は因子負荷量.40以上の項目に注目して命名した。信頼性の検討はCronbachの α 係数、折半法（Spearman-Brownの係数）およびI-R（Item-Remainder）相関を算出し検討した。また、妥当性の検討は、内容的妥当性、基準関連妥当性からおこなった。統計解析にはSPSS Statistics17.0を用いた。

E. 倫理的配慮

研究対象者へ研究の主旨の他、研究への協力は自由意志によること、プライバシーは保護され、データは本研究の目的以外では使用せず、分析後電子データは復元できない方法で完全に消去することなどを書面で説明し本人の研究への協力を依頼した。また、調査票の回収をもって承諾が得られたものとした。なお、本研究は筆者らが所属する大学の倫理委員会の承認を得た。

Ⅲ 研究結果

A. 対象者の特性

調査対象地区に居住する40歳以上の男女合計342名に調査票を配布し、SC関連36項目に欠損値のない217名（男性102名、女性115名）が分析の対象となった（有効回答率63.4%）。対象者の概要を表2に示す。

対象者の年齢層で最も多かったのは60-64歳の50

名（23.0%）であった。

表2 対象者の属性

	n=217	
	数	%
性別	男性	102 47.0
	女性	115 53.0
満年齢	40-44	27 12.4
	45-49	10 4.6
	50-54	38 17.5
	55-59	34 15.7
	60-64	50 23.0
	65-69	15 6.9
	70-74	23 10.6
	75-79	13 6.0
	80歳以上	7 3.2

B. SC関連36項目の得点

SCに関連する36項目の平均値および標準偏差を表3に示す。天井効果およびフロア効果（平均値±標準偏差）を確認したところ、「1. 自分が住んでいる地域が好きですか」「3. 住んでいる地域を大切に思いますか」「4. これからもこの地域に住み続けたいですか」「12. 自分もこの地域の一員だということを感じていますか」「13. 近所の人とあいさつや、会話をする頻度について教えてください」「14. 普段の近所付き合いで、地域の人々の冠婚葬祭のことなどを知る機会がありますか」「16. ご近所の人へ迷惑をかけないように生活していこうとしていますか」「26. 地域の自然を、かけがえのない存在だと感じますか」「29. 地域にある自然は、あなた自身の心身の健康に役立っていますか」「31. 近所関係について教えてください」「35. あなたは投票には行きますか」でフロア効果がみられた。また、天井効果では「10. その他の団体、活動（商工会・業種組合、宗教、政治等）にどの程度参加していますか」でみられた。しかし、その程度がわずかであり、また該当する項目の得点分布をヒストグラムで確認したところ、得点のピークにやや偏りがみられるが、今回は尺度開発ではなく従来とは異なる視点からのSCの把握を試みるため今回は分析に加えた。

表3 SC 関連 36 項目の各項目別平均値および I-T (Item-Total) 相関分析

	平均値	SD	I-T 相関分析 (n=217)
1 自分が住んでいる地域が好きですか	1.59	.760	.512**
2 地域の雰囲気や土地柄をどう思いますか	1.80	.759	.506**
3 住んでいる地域を大切に思いますか	1.35	.620	.549**
4 これからもこの地域に住み続けたいですか	1.71	.813	.537**
5 この地域で生活することに満足していますか	1.88	.729	.459**
6 お住まいの地域の伝統、文化、風習を伝承していくことにかかわっていますか	2.32	1.113	.578**
7 地縁的な活動(自治会、町内会、婦人会等)にどの程度参加していますか	2.71	.830	.534**
8 スポーツ・娯楽活動(芸術文化活動、生涯学習等)にどの程度参加していますか	3.01	1.253	.391**
9 ボランティア・NPO・市民活動(まちづくり、子育て等)にどの程度参加していますか	3.39	1.138	.422**
10 その他の団体、活動(商工会・業種組合、宗教、政治等)にどの程度参加していますか	3.96	1.150	.398**
11 あなたにとっては利益がないかもしれませんが、地域全体にとっては利益があるような活動にあなたはかかわりたいと思いますか	2.18	.850	.578**
12 自分もこの地域の一員だということを感じていますか	1.55	.719	.678**
13 近所の人とあいさつや、会話をする頻度について教えてください	1.46	.707	.472**
14 普段の近所付き合いで、地域の人々の冠婚葬祭のことなどを知る機会がありますか	1.64	.746	.560**
15 近所付き合いで、できるだけ近所とあわせた付き合いをするようにしていますか	1.68	.665	.667**
16 ご近所の人へ迷惑をかけないように生活していこうとしていますか	1.35	.636	.287**
17 体調が悪い時、近所の人を声をかけてくれたり、世話をしてくれることがありますか	2.43	1.012	.593**
18 地域で冠婚葬祭などがある場合、あなたは地域のどれくらいの人に、お祝いや香典などを出しますか	2.07	.986	.564**
19 ご近所の方は、あなたの心配事や愚痴を聞いてくれますか	2.31	.777	.573**
20 地域のどれくらいの範囲の人と、つながりや絆を感じますか	2.66	.884	.645**
21 あなたの地域に他の地域から移り住みたいという人がいる時、あなたはその方を受け入れますか	1.91	.678	.339**
22 地域の方は多くの場合、他の人の役に立とうと思っていますか	2.23	.805	.604**
23 ご近所の人とお付き合いの程度について教えてください	1.76	.627	.596**
24 親戚・親類とお付き合いについて教えてください	2.51	.823	.315**
25 生活に地域の人や近所の人とのつながりや絆を感じる活動やお付き合いがありますか	2.05	.798	.684**
26 地域の自然を、かけがえのない存在だと感じますか	1.39	.623	.474**
27 地域の自然に対して、人間の力を超えたおそれ(畏れ)のようなものを感じますか	2.12	.988	.303**
28 自分自身が、地域の自然の営みの中に生かされている存在だと感じますか	1.90	.821	.487**
29 地域にある自然は、あなた自身の心身の健康に役立っていますか	1.65	.725	.534**
30 あなたの生活には、地域の自然の恵みによって成り立っている面がありますか	1.76	.731	.582**
31 近所関係について教えてください	1.70	.738	.574**
32 住んでいる地域の人々に対する信頼について教えてください	2.00	.776	.570**
33 国内の旅先や見知らぬ土地で会う人について、どのくらいの人を信じますか	2.35	.756	.400**
34 友人などと一緒になった時に、政治の話はしますか	2.20	.628	.416**
35 あなたは投票には行きますか	1.35	.582	.494**
36 あなたは政治活動に参加していますか	2.99	.915	.490**

** p<0.01

C. SC に関連する 36 項目の因子構造

SC に関連する 36 項目全てを指定し探索的因子分析をおこなった。累積寄与率が 50% を越えるところの因子数を採用した結果、5 因子が抽出された。2 回目の因子分析では、因子数を指定し 36 項目全てを指定してプロマックス回転(最尤法)をおこなった。その結果と各因子間の相関係数が表 4 である。なお、どの

因子に対しても、因子負荷量が .40 以下の項目は残余項目とした。また、36 項目の I-T (Item-Total) 相関は .28 から .68 の範囲であった。

抽出された因子パターンから、第 1 因子は「近所の人がか心配事や愚痴を聞いてくれる」、「体調が悪い時近所の人を世話してくれることがある」、「近所の人との付き合いの親密性」などの 10 項目で構成され【近所関

表4 SC 関連項目の因子分析結果（プロマックス回転、最尤法）

因子名および質問項目	因子負荷量					共通性
	1	2	3	4	5	
第1因子：近所関係の質						
19.近所の人が心配事や愚痴を聞いてくれる	.800	.059	-.069	-.051	-.052	.639
17.体調が悪い時近所の人が世話してくれることがある	.718	.049	-.015	-.053	.016	.530
23.近所の人との付き合いの親密性	.683	.100	.011	-.067	.033	.604
26.地域の人や近所の人とのつながりや絆を感じる活動の頻度	.598	-.026	.117	.076	.086	.598
13.近所の人とあいさつや会話をする頻度	.465	-.131	.115	.110	-.012	.313
14.近所付き合いで地域の人々の冠婚葬祭のを知る機会	.456	.130	-.001	.045	.060	.556
15.できるだけ近所とあわせた付き合いをするようにしている	.425	.032	.023	.283	.074	.614
第2因子：地域への愛着						
1.自分の地域が好き	.102	.963	-.004	-.183	-.073	.795
5.この地域での生活に満足している	.037	.867	-.032	-.111	-.051	.712
2.地域の雰囲気や土地柄を気に入っている	.034	.834	.072	-.089	-.067	.659
4.これからもこの地域に住み続けたい	.015	.719	-.034	.047	.054	.690
3.地域を大切に思う	-.087	.658	-.024	.252	-.006	.623
第3因子：自然との共生						
29.地域の自然は心身の健康に役立っている	.105	.027	.720	.058	-.110	.608
28.地域の自然の営みの中に生かされている存在だと感じる	-.006	-.023	.718	-.150	.181	.576
30.生活には地域の自然の恵みによって成り立っている面がある	.131	.038	.716	.059	-.091	.635
26.地域の自然をかけがえのない存在だと感じる	-.208	.131	.689	.107	.022	.617
27.地域の自然に対して人間の力を超えた畏れを感じる	.036	-.114	.673	-.240	.091	.411
第4因子：信頼感						
22.地域の人々は他の人の役に立とうと思う	.163	-.056	.094	.853	-.331	.639
32.地域の人々に対する信頼感	.068	.022	-.191	.729	.018	.608
33.旅先や見知らぬ土地で出会う人に対する信頼感	-.108	.013	-.096	.462	.178	.546
20.地域の人とつながりや絆を感じる範囲	.300	-.033	.019	.435	.062	.505
24.親戚・親類との付き合いの頻度	.119	-.168	-.054	.416	-.028	.338
第5因子：地域参加						
9.ボランティア・NPO・市民活動に参加する頻度	.150	-.083	-.037	-.167	.619	.479
34.友人などと一緒になった時に政治の話をする	-.151	-.049	.168	.091	.494	.363
36.政治活動に参加している	.105	-.056	.081	-.003	.481	.453
10.その他の団体、活動に参加する頻度	.175	-.091	.050	-.136	.457	.267
11.地域全体にとって利益があるような活動にかかわりたい	-.152	.179	.137	.164	.456	.475
7.地縁的な活動に参加する頻度	.358	-.014	-.103	-.040	.416	.615
残余項目						
31.近所関係における面識・交流の範囲	.379	.082	-.045	.152	.141	
18.地域の人にお祝いや香典などを出す範囲	.338	-.076	-.032	.306	.116	
6.地域の伝統、文化、風習を伝承していくことにかかわっている	.259	-.002	.128	.079	.239	
12.自分もこの地域の一員だと感じる	.201	.095	.007	.302	.266	
16.近所の人へ迷惑をかけないように生活していこうとしている	.189	-.084	.022	.257	-.072	
21.地域に移り住みたいという人がいる時その方を受け入れられる	-.076	.020	.061	.237	.157	
35.投票への参加度	-.163	.110	-.052	.350	.388	
8.スポーツ・趣味・娯楽活動に参加する頻度	.169	.007	-.113	.066	.273	
	寄与率	27.41	8.11	5.93	4.70	4.39
	累積寄与率	27.41	35.52	41.45	46.15	50.54
因子間相関	第1因子：近所関係の質	—	.393**	.383**	.648**	.586**
	第2因子：地域への愛着		—	.366**	.375**	.294**
	第3因子：自然との共生			—	.343**	.337**
	第4因子：信頼感				—	.506**
	第5因子：地域参加					—

**p<0.01

係の質】と命名した。第2因子は「自分の地域が好き」、「この地域での生活に満足している」、「地域の雰囲気や土地柄を気に入っている」などの5項目から構成され【地域への愛着】と命名した。第3因子は「地域の自然は心身の健康に役立っている」、「地域の自然の営みの中に生かされている存在だと感じる」、「生活には地域の自然の恵みによって成り立っている面があ

る」などの5項目で構成され【自然との共生】と命名した。第4因子は「地域の人々は他の人の役に立とうと思う」、「地域の人々に対する信頼感」、「旅先や見知らぬ土地で出会う人に対する信頼感」などの8項目から構成され【信頼感】と命名した。第5因子は「ボランティア・NPO・市民活動に参加する頻度」、「友人などと一緒になった時に政治の話をする」、「政

治活動に参加している」などの8項目から構成され【地域参加】と命名した。

D. 妥当性の検討

1. 基準関連妥当性

SCを測定する36項目の合計得点と、外的基準(SF-8のMCS)とのPearsonの積率相関係数を求めた。その結果、有意な正の相関関係($r=.178$, $p<.001$)が認められた(表5)。

表5 SC関連36項目とSF-8の相関

SF-8	SC36項目	95%信頼区間	
		下限値	上限値
PCS	-.021	-.154	.112
MCS	.178**	.046	.304

PCS:身体的サマリースコア
MCS:精神的サマリースコア
** $p<.01$

2. 内容的妥当性

本研究では、調査項目を地域住民の暮らしや社会文化的脈絡をより深く理解する手段を熟知している、大学教員、地域の看護専門職、さらには地域に根ざす地縁組織の長とともに確認し、これらの項目はSCの概念を明らかにするためにふさわしいという見解を得た。また、調査項目は中山間地域のSCを質的に探究した研究結果¹¹⁾との整合性があり、プレテストをおこなうことで内容を精選し妥当性の検討をおこなった。I-T相関分析においては、1項目を除けば全て相関係数.03以上であった。

E. 信頼性の検討

内的整合性の指標としてCronbachの α 係数、折半法によるSpearman-Brownの係数およびI-R相関を算出した。その結果、各因子の α 係数は.71~.89、Spearman-Brownの係数は各因子.67~.86となり、概ね良好な値を示した。また、I-R相関は.24~.81であり、1項目を除く全ての項目で.25以上の相関係数を示した(表6)。

表6 信頼性の検討(Cronbachの α 係数、Spearman-Brownの係数、I-R相関)

	Cronbachの α 係数	Spearman-Brownの係数	I-R相関
SC36項目全体	.91	.85	.241~.654
第1因子:近所関係の質	.85	.81	.470~.647
第2因子:地域への愛着	.89	.86	.683~.813
第3因子:自然との共生	.81	.80	.517~.662
第4因子:信頼感	.76	.71	.240~.631
第5因子:地域参加	.71	.67	.325~.504

IV. 考察

A. 中山間地域のSCの因子構造の検討

因子分析の結果、【近所関係の質】、【地域への愛着】、【自然との共生】、【信頼感】、【地域参加】の5因子が抽出された。農村のSCは、協働的SC(信頼、地域貢献、地域活動など)と、互助的SC(近所や友人との付き合い、相互扶助など)から構成されている¹⁸⁾といわれる。本研究における中山間地域の因子構造をみると、近所関係の内容を表す第1因子は“互助的SC”として、また、信頼感を表す第4因子と、地域参加を表す第5因子は“協働的SC”として解釈可能である。第2因子と第3因子に含まれる項目は、主に本研究で独自に採用したものである。このことから、本研究における因子構造は中山間地域のSCの構造をおおよそ反映するものであると考えられる。

B. SCに関連する項目の妥当性

1. 内容的妥当性

調査項目を大学教員、地域の看護専門職および、地縁組織の長とともに確認した。また、先行研究の結果¹¹⁾との整合性があり、I-T相関分析においては、1項目を除けば全て相関係数.03以上であった。これらのことから内容的妥当性は確保できたと考えられる。

2. 基準関連妥当性

これまでSCを巡る研究では、主観的健康感^{15,22)}や、精神疾患の罹患率²³⁾に好ましい影響を与えていることが報告されている。また、SCという言葉こそ使用されていないが、SCの一部として捉えることができるような要素(例えば、地域の仲間との結びつき)が、高齢者の健康と人生の質に影響を与えていることが指摘^{24~25)}されている。また、地区単位でSCを捉えると、気軽に挨拶を交わせる関係性、近所の助け合い、留守中の世話をしてくれる関係性などが地域の中にあることが重要であり²⁶⁾、これが自覚的な健康観を高めることが指摘されている。したがって、本研究ではSCを測定する項目がMCSと正の相関関係がある

と考えた。そこでSCを測定する36項目の合計得点と、MCSとの相関分析おこなった結果、有意な正の相関関係 ($r=.178$, $p<0.01$) が認められた。これらの手続きにより一定の基準関連妥当性 (同時的妥当性) が確認されたと考えられる。しかし、項目内容の多様性を考えると、一つの尺度だけでは十分に検証できない可能性があるため、今後は複数の尺度を用いて多面的に検討することが必要である。

C. SCに関連する項目の信頼性

SCに関連する項目の信頼性をCronbachの α 係数、Spearman-Brownの係数、I-R相関から検討した(表6)。その結果、Cronbachの α 係数は全体で.91、Spearman-Brownの係数は全体で.85の範囲であり、I-R相関は1項目を除いた全ての項目で.25以上の相関係数を示したため、内の一貫性が大凡確認できたと考えられる。

D. 中山間地域のSCに関連する要因

因子分析によって得られた5因子のうち、【自然との共生】と【地域への愛着】の因子は従来のSC論では扱われてこなかった因子である。わが国における代表的な調査のひとつである内閣府国民生活局の調査⁴⁾では、SCの要素はPutnamによって示された「信頼、規範、ネットワーク」として捉えられており、以降、多くの研究がこの枠組みを参考としている。また、わが国のSCを測定する最新のデータ²⁷⁾である全国規模の調査²⁸⁾も、同様の枠組みを採用して調査が行われているため、これらの3つの要素がSCの基本的要素として捉えられてきたことがわかる。しかし、今回の研究では、上記の2つの因子が新たに抽出され、両者ともその他の下位尺度と有意な正の相関を示している。つまり、中山間地域ではこれらの要素に着目する必要があると考えられる。

中山間地域には、古くから信仰の対象となっている山の存在、暮らしを支えた森や川や水との関係性、特有の自然のメカニズムの中で培われた知恵や技術が存在する。これは自然界と良い関係を保とうとする地域住民の認識から生まれた生活様式であると考えられるが、こういった生活様式に関連する様々な行事は、住民同士の関わり合いの場を提供することになる。つまり、中山間地域において、自然環境要因は隣保共助や地域のネットワークの形成に関連している重要な要素であるということが推測される。したがって、中山間地域のSCを把握するにはこうした側面に注目することが必要であると考えられる。

「地域への愛着」因子の中に含まれる“自分の地域が好き”“この地域での生活に満足している”“地域の雰囲気や土地柄を気に入っている”といった項目は、自らが住む地域の特性や人間関係に関する満足感が大きく影響していると考えられる。主観的健康感と抑うつとの関連を、受領サポートと提供サポートとの関連から分析した研究²⁹⁾では、受領・提供の両方のサポートがある者が最も心理的健康がよいことが報告されている。日常生活において住民同士の関わり合いが多い中山間地域では、「お互い様」「持ちつ持たれつ」といった言葉で表わされることが多い互酬性の規範¹⁰⁾を含む活動が少なくない。つまり、愛着という要素は中山間地域の暮らしの中にある規範と関連している可能性がある。したがって、「地域への愛着」因子に関連する要素を捉えることは、SCを捉える際に重要な視点のひとつであると考えられる。

これまで、特に自然環境要因については、SCの概念には含まれない^{30~31)}とされてきたが、本研究の結果から中山間地域では自然に関連する要素を捉えることの必要性が示唆された。また、このような視点は、自然環境が生活空間の大部分を占める他の中山間地域のSCを捉える際にも応用できる可能性があると考えられるが、今回の研究では、中山間地域のSCの本質的な要素や関係性の経路などについて言及することができず不明点が数多く残されている。したがって、今後は中山間地域のSCを構成する可能性がある要素を一つひとつ拾い上げ、尺度化していくことが大きな課題のひとつであると考えられる。

V. 本研究の限界と今後の課題

本研究の対象者は中山間地域の居住者であったが、選定した地域が限定されているため、その地域特性に依存した結果であることが否定できない。基準関連妥当性の検討においては、ひとつの尺度を基準として検討したが、SCの多面性を考えれば今後は信頼性が確立されている複数の尺度を用いて検討することが必要であると考えられる。調査項目においても、天井効果およびフロア効果がみられた項目を今回は分析に加えた。これは、当該項目のI-T相関が1項目を除くと.47~.67と十分に高いこと、項目の内容的妥当性が確保でき、加えて下位尺度の α 係数が概ね良好な値を示したことにより判断したものであるが、上記の点を踏まえると、本来測定したい概念が適切に測定できていない可能性もある。したがって、今後は項目内容のさら

なる精選をおこないながら、地域特性が異なる中山間地域を対象として研究を進める必要がある。また、今後中山間地域の SC の測定尺度の開発をおこなう際には、GFI (Goodness of Fit Index)、AGFI (Adjusted GFI)、CFI (comparative fit index) などの値を求め、妥当性や適合度の検討などを十分におこなう必要がある。

VI. 結論

本研究では、中山間地域におけるソーシャル・キャピタルの把握を試みた。その結果、【近所関係の質】、【地域への愛着】、【自然との共生】、【信頼感】、【地域参加】の5因子が抽出された。このうち、【自然との共生】と【地域への愛着】の因子は従来の SC 論では扱われてこなかった因子である。今回、妥当性の検討、項目内容のさらなる精選、地域特性が異なる地域を対象とした研究の必要性といった課題は残されたが、中

山間地域では上記の要素が SC に関連する可能性があることが示唆された。今後は異なる対象で調査を重ね、従来の指標との関連を捉えながら、これらの要素が中山間地域の SC となるのかどうかを検証していくことが必要である。

謝 辞

本研究にご参加くださいました皆様に心から感謝いたします。また、地域・在宅看護学分野の安田貴恵子教授に感謝いたします。この他、里山・遠隔看護学分野の多賀谷昭特任教授、那須裕元特任教授をはじめ、研究の遂行にあたりご助言をくださいました皆様に深く感謝いたします。本論文は科学研究費補助金（課題番号 24660048 健康資源としての Satoyama の測定尺度の開発研究代表者多賀谷昭）にもとづく研究の一環として行われました。

本研究における利益相反はありません。

引用文献

- 1) 近藤克則：幸福・健康の社会的決定要因—社会疫学の視点から。科学 80 (3)：290-294. 2010.
- 2) 田中敬文：ソーシャル・キャピタル総説 (山内直人, 田中敬文, 奥山尚子編). 5-13. ソーシャル・キャピタルの実証分析. 大阪大学大学院国際公共政策研究科 NPO 研究情報センター. 2011.
- 3) Putnam R: Making Democracy Work. Princeton University Press. 1993. 川田潤一訳：哲学する民主主義. NTT 出版. 2001.
- 4) 内閣府国民生活局：ソーシャル・キャピタル—豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて。国立印刷局. 2003.
- 5) 内閣府経済社会総合研究所：コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書. 内閣府経済社会総合研究所. 2005.
- 6) 山内直人：コミュニティにおけるソーシャル・キャピタルの役割. Environmental information science. 39 (1): 10-15. 2010.
- 7) 近藤克則：検証「健康格差社会」介護予防に向けた社会疫学の大規模調査. 医学書院. 2007.
- 8) 市田行信：ソーシャル・キャピタル—地域の視点から— (近藤克則編). 検証「健康格差社会」—介護予防に向けた社会疫学の大規模調査. 107-119. 医学書院. 2007.
- 9) 埴淵知哉, 近藤克則, 村田陽平：健康な街の条件—場所に直目した健康行動と社会関係資本の分析. 行動計量学 37 (1)：53-67. 2010.
- 10) 稲葉陽二：ソーシャル・キャピタル入門. 中央公論新社. 2011.
- 11) 吉村隆, 北山秋雄：里山の暮らしにおけるソーシャル・キャピタルの特徴—里山に暮らす高齢者のインタビューを通して—. 日本ルーラルナーシング学会誌 8：1-15. 2013.
- 12) 岩崎正弥：地域におけるソーシャルキャピタル分析の課題, 地域協働まちづくりリサーチセンター年報 (2). 23-26. 豊橋技術科学大学地域協働まちづくりリサーチセンター事務局. 2006.
- 13) 横山繁樹, ミトラ・モアザミ：イラン半乾燥地帯における農地交換分合と認知的社会関係資本—マルカジ州アラック郡の事例. 農村計画学会誌 26 (2)：69-75. 2007.
- 14) Grootaert C, Bastelaer T: Understanding and measuring social capital: A multidisciplinary tool for practitioners. World Bank. 2002.
- 15) Kawachi I, Kennedy BP, Glass R: Social capital and self-rated health, A contextual analysis. American Journal of Public Health 89: 1187-1193. 1999.
- 16) Putnam R: Bowling Alone. Princeton University Press. 2000. 柴内康文訳：孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生. 柏書房. 2006.
- 17) Harper R, Kelly M: Measuring Social Capital in the United Kingdom. Office for National Statistics. 2003.
- 18) 農村におけるソーシャル・キャピタル研究会：農村のソーシャル・キャピタル—豊かな人間関係の維持・再生に向けて—. 農林水産省農村振興局. 2007.
- 19) 日本総合研究所：日本のソーシャル・キャピタルと政策—日本総研 2007 年全国アンケート調査結果報告書—. 日本総合研究所. 2008.
- 20) 山内直人, 田中敬文, 奥山尚子：ソーシャル・キャピタルの実証分析. 大阪大学大学院国際公共政策研究科 NPO 研究情報センター. 2011.
- 21) 福原俊一, 鈴嶋よしみ：健康関連 QOL 尺度—SF-8 と SF-36. 医学のあゆみ 213 (2)：133-136. 2005.
- 22) Helliwell J F, Putnam R: The social context of well-being. Proceedings of the Royal Society. Published online 31: 1435-1446. 2004.
- 23) McCulloch A: Social environments and health, Cross sectional national survey. BMJ 323: 208-209. 2001.
- 24) 大森純子：高齢者にとっての健康—「誇りをもち続けられること」農村地域におけるエスノグラフィーから—. 日本看護科学会誌 24 (3)：12-20. 2004.

- 25) 大森純子：前期高齢女性の家族以外の身近な他者との交流関係に関する質的記述的研究—関係性の特徴「気遣い合い的日常交流」—。老年社会科学 27 (3) : 303-313. 2005.
 - 26) 藤澤由和, 濱野強, 小藪明生：地区単位のソーシャル・キャピタルが主観的健康感に及ぼす影響。厚生指標 54 (2) : 18-23. 2007.
 - 27) 黒田かをり, 高豊盛：ソーシャルキャピタルと信頼・市民参加 (山内直人, 田中敬文, 奥山尚子編), 117-129. ソーシャル・キャピタルの実証分析。大阪大学大学院国際公共政策研究科 NPO 研究情報センター。2011.
 - 28) 日本総合研究所編：日本のソーシャル・キャピタルと政策—日本総研 2007 年全国アンケート調査結果報告書—。日本総合研究所。2008.
 - 29) 斎藤嘉孝：社会的サポート (近藤克則編)。検証「健康格差社会」—介護予防に向けた社会疫学的大規模調査—。91-97. 医学書院。2007.
 - 30) 佐藤誠：社会資本とソーシャル・キャピタル。立命館国際研究。16 (1) : 1-30. 2003.
 - 31) 要藤正任：ソーシャル・キャピタルは地域の経済成長を高めるか?—都道府県データによる実証分析—。国土交通政策研究。61. 2005.
 - 32) 糸林誉史：ソーシャル・キャピタルと新しい公共性。文化女子大学紀要人文・社会科学研究。15 : 75-85. 2007.
-